



藤岡中学校文化祭「藤華祭」より 笑顔満載 ～藤中開花～

藤岡中学校は、第一中と第二中の統合から5年目を迎えます。



「誰一人 取り残さない教育の推進」



栃木市
マスコットキャラクター
とち介

『第3期栃木市教育計画』

基本理念

希望に向かい 伸び伸びと個性を発揮し
互いに認め合いながら より良い社会を築いていく
‘とちぎ愛’ に満ちた人を育てます



栃木市教育ニュース



「地域とともにある学校～栃木市コミュニティ・スクール～」をテーマに、各学校の様子を市民の皆様を紹介します。

地域とともにある学校



【岩舟中 学校支援ボランティア
国語科：毛筆の指導】



【皆川城東小3・4年生 総合的な
学習の時間 ふるさと巡り：城山】



【大平東小 学校支援ボランティア
家庭科：手縫いの指導】



【国府北小 稲刈り
田んぼをまもる会とともに】



【家中小 学校支援ボランティア
読み聞かせ：おとのえほん】



【南小 PTA祭・
ミニスポーツフェスティバル】



【西方中 地域活動
イチゴ狩りボランティア】

「ボーッとする時間」の価値

「魔女の宅急便」の作者である角野栄子さんとお話する機会があったのは、今から30年以上も前のことです。当時から角野さんは、優しく温かな語り口で、相手に寄り添いながらも芯のあるお話をされる方でした。私はすっかりその魅力に引き込まれ、特に「子どもにとって本当に必要なことは何か」という話題になったときの言葉が心に残っています。角野さんは即座に、『ボーッとする時間』と、『子どもたちが生まれつきもっている想像力』を挙げ、これらを大切にしたいと力強く語っていらっしゃいました。ぼんやりと空を見上げる時間。誰かに何かを求められるわけではなく、ただそこに座って風に当たっているだけの、何もしない時間。大人から見れば、無駄に見えるかもしれません。けれど、その「無駄」の中にこそ、子どもの想像力が育つ入り口が隠れていると言うのです。想像力は、特別な才能ではありません。心の中に開く小さな扉のようなものです。空に浮かぶ雲を生き物に見立てたり、停電したときに天井に映る揺れる影を見て不思議な世界を空想したり。そんな「ボーッとする時間」のひとつに、子どもの世界は深まっていきます。想像したり、あれこれ空想したり、新しいものを創造したりする力は、この時間の延長線上にあるのです。誰にも見えない自分だけの物語を心の中にしっかりともっていることが、子どもたちをしなやかに、そして強くしていくのだと、熱く語り合ったことが昨日のここのように思い出されます。

現代は人々の生活が豊かになり、便利さ、スピード、効率の良さが最も重要視される考え方が強くなっています。大人も子どもも心にゆとりをもてなくなり、「何もしない時間の価値」を体験しないまま成長しているように感じます。「10年ひと昔」や「秋の夜長」といった言葉も、今ではあまり聞かなくなりました。子どもたちは、親や社会が敷いたレールから、はみ出さず遅れないようにと急いでいます。途中下車する余裕もない中で、知識や技術を重ね、慌ただしい毎日を送っています。

最近、AI(人工知能)が生活のあらゆる場面に入り込み、とても便利になりました。調べ物をすれば、あっという間に答えが出てきます。しかし、AIが急激に普及している今だからこそ、角野さんが長年力説されてきたように、子どもたちが答えのない「ボーッとする時間」と仲良くなることが必要だと強く感じます。AIがどれほど賢くなっても、たった一人の子どもの胸に芽生えた物語には敵いません。人は自分の中に物語をもつことで、周りの人と心を通わせ、手をつなぐことができるのです。今、子どもに必要なのは、豊かな想像力、新しいアイデアを思いつく着想力・想像力、そして創造力です。しかし、これらの力は低下しているという報告もありますが、その力の源にあるのが、「ボーッとする時間」です。心が解き放たれることで、これらの力は育まれます。子どもの笑い声は、いつの時代も人の心を癒やしてくれる最高の音であり、平和のシンボルです。このような、ゆとりある「ボーッとする力」が、素晴らしい人間性を育むことにつながっていくのです。角野さんは91歳になった今でも、「ボーッとする時間」の大切さを伝え続けていらっしゃいます。私も、年を重ねたせいではなく、子どもの頃に味わった「ボーッとする時間」の価値を思い起こしながら、日々の生活を改めて楽しみたいと思います。私の座右の書である、木下竹次の「学習言論」(大正12年出版)には、こう書かれています。『子どもを信じて、家庭や学校や社会のさまざまな縛りから解放すべきである!』これは明治時代からずっと言われてきた、普遍的な教えなのです。

教育長職務代理者 後藤 正人



美術館・文学館より

美術館では、企画展および収蔵品展を開催し、市ゆかりの作家の作品及び国内外の優れた作家の作品を展覧しています。また、文学館では、市ゆかりの作家等の企画展を開催するとともに、文学に関する展示や市史に足跡を遺した先人たちを通年で紹介しています。

子どもの頃から文化芸術に親しんでもらうため、出前授業、校外学習の受入のほか、教員見学会の開催、教員研修の受入等の教育普及活動に学校と連携して取り組んでいます。さらに、毎月第3日曜日「家庭の日」は、中学生以下1名につき同伴者2名まで無料で観覧できます。

現在は、美術館では企画展「鈴木賢二と徹」、収蔵品展Ⅱ、文学館では企画展「『歷程』と逸見猶吉、岡安恒武」を開催中です。(両館とも3月22日まで) ぜひご来館ください。



美術館と文学館は、わたしたちの学びを豊かに広げてくれる、身近な「文化の教室」です。美術館では、多くの方が芸術との出会いを楽しんでおり、本物の作品に触れる体験は、感じる力や考える力を育み、「自分なりに受け取っていい」という安心感を子どもたちに届けてくれます。

文学館では、山本有三、柴田トヨ、吉屋信子といった、栃木市ゆかりの文化人の常設展示を行っています。身近な地域から生まれた言葉や物語に触れることで、子どもたちは、「このまちは、こんなに素晴らしい表現者がいる」という誇りを感じることが出来ます。両館は、文化を特別なものにせず、日常の中で出会えるものとして開かれた存在です。栃木市ならではの文化の豊かさが、次の世代へと静かに受け継がれています。美術館・文学館で、このまちに息づく文化の豊かさを、このまちの文化の魅力を、ぜひ味わってみてください。



教育委員 館野 知美



教育委員の活動日誌



教育委員は、栃木市の教育の充実のため、毎月の定例教育委員会をはじめ、様々な活動に積極的に取り組んでいます。今号では、教育委員が市内小中学校を訪問した際の様子を紹介します。今年は4つの小学校と3つの中学校で実施しました。



教育委員学校訪問

【訪問した学校】
寺尾小、国府南小
大平東小、家中小
栃木西中、大平中
岩舟中

栃木シティフットボールクラブ、J3優勝おめでとうございます。たくさんさんの感動と元気をありがとうございました。選手の方々の連携、コーチ・スタッフの方々の熱心なサポート、それがチームの素晴らしい雰囲気を作り出し、優勝へと繋がったと聞きました。

教育委員の仕事のひとつ学校訪問では、短い時間ではありますが、その学校の雰囲気がよく伝わってきます。子どもたちが元気に挨拶してくれたり、真剣に授業と向き合っている姿、掲示物等を見させていただいたり、先生方がいる工夫されて、学校を楽しく有意義にしてくださっている様子がとても感じられます。子どもたちにそれが伝わっていて、信頼関係が築かれているのだと思いました。

各学校ともいろいろと課題はありますが、笑顔がさらに増えますよう、これからも地域と共に寄り添って行きたいと思っています。



教育委員 五十嵐 幸男

3校ほど学校訪問をさせていただきましたが、生徒一人ひとりの個性や背景、学習スタイルの違いを尊重し、可能な限り丁寧に配慮した教育環境を提供したいという、先生方の強い思いが伝わってきました。多様性のある学校づくりには、地域社会や住民の協力が不可欠であり、授業や体験学習への支援、登下校時の見守り、防災・防犯への協力などを通じて、地域のつながりと教育力の向上が図られていると感じました。各校の取組事例を共有し、相互に取り入れていくことが重要だと思います。

来年以降も、生徒の皆さんの日頃の様子を確認できる学校訪問を楽しみにしています。



教育委員 岩崎 好宏

教育委員の仕事で私がとても楽しみにしている1つがこの学校訪問です。子どもたちの生き生きとした表情や意欲的に学ぶ姿を身近で感じることができる大変意義深く有意義な時間でもあります。

それぞれ、学校の特色であったり、教育活動や地域との連携を知る事ができ、そして何よりも教職員の皆様が教材や指導方法を工夫しながら子どもたちに寄り添っている姿を拝見する事で私自身も多くの学びをいただいています。

この学校訪問で得た学びを活かして子どもたちのより良い学びと成長になる環境作りを支えていけるよう教育委員として努めてまいります。



教育委員 大塚 裕子

私たちは毎年3～4校の運動会にお邪魔しております。

コロナ後は、ほぼ午前中のみ昼食なしの運動会になりました。種目も時間も縮小され密度の濃い運動会になりました。

子ども達が自分たちで作る運動会。生徒はもちろん先生方、ご家族の方、地域の方々みんなが夢中で応援します。準備に忙しい生徒、保健係としてお手伝いする生徒、接待係でお茶だしの生徒、競技状況をまるでアナウンサーのように伝える放送係の生徒、下級生の面倒を見る生徒等々…みんなの仕事をしながら自分のクラスの応援も忘れません。

素直に喜び、悔しがる子どもたちを見てると私もつついっいつい当時は懐かしく思い出してしまいます。



教育委員 西脇 はるみ

令和8年4月1日 栃木北中学校 開校！

創立から79年の歴史を刻んだ栃木西部地域の皆川中学校・吹上中学校・寺尾中学校が統合され、現在の吹上中学校の位置に、「栃木市立栃木北中学校」が新学校として開校します。

4月1日には、3中学校がこれまで刻んできた歴史と伝統を受け継ぎながら、全校生徒306名（予定）が新学校としての新たな歴史のスタートを切ります。



【栃木市立皆川中学校】



【栃木市立吹上中学校】



【栃木市立寺尾中学校】



【栃木北中学校の校章】

全国的に少子化が進行する中、教育委員会では、適正な児童生徒数や学級数を確保し、活力ある学校づくりを進めていくため、学校適正配置に取り組んでいます。

小中学校の適性配置基本構想では、10年後、20年後の児童生徒数を見据え、本市における学校配置の現状と課題、地域別の学校配置の具体的実現方策、望ましい学校形態の将来像、今後の取り組み等についてまとめています。

※栃木市小中学校の適正配置基本構想は、栃木市ホームページ（教育委員会内）に掲載しております。

教育長通信「～学校訪問 2025 に寄せて～」

「最近の子どもたちは、授業中よく話し合いをするんですね」

学校訪問を終えた、ある教育委員の言葉です。確かに、我々昭和世代が子どもの頃に受けた授業のスタイルは、先生が説明したり板書したりする内容を静かに理解してひたすら知識量を増やす、といったものが主流であったように思います。なぜなら、当時の社会の求める力が、知識の習得や集団への適応力、勤勉に指示に従う姿勢などであったからに他なりません。

時代は大きく変わり、今や変化のスピードが一時代前の7倍速とも言われる、複雑で予測困難な社会を生き抜く現代の子どもたちには、習得した知識を活用して思考したり判断したり表現したりする力のもとより、自分と異なる考えや価値観をもつ人達とも議論を重ねて一定の納得解を見出すといった力をも必要とされています。しかし、これらの力は一朝一夕に身に付くものではありません。そして、この様な力を育むために、子どもたちに考え議論させる授業を工夫する、といった現場の先生たちに課せられたミッションはそう容易ではありません。

しかしそんな懸念をよそに、年間を通じて市内多くの学校を訪問する中でよく目の当たりにしたのは、ベテランと若手の別なく同僚性を発揮しながら、目の前の子どもたちに育むべき力の育成に向けて大いに語り合い、学び合うシーンでした。そして同時に、子どもたち一人一人の個性や特性を尊重し、その思いやニーズに最大限応えようと努める先生たちの姿でした。

先般、とある研修会でこんな話を聞きました。映画「下町ロケット」のモデルにもなった北海道のロケット開発会社植松電機の社長さんが、社会貢献の一環としてペーパークラフトのロケットに燃料を積んで飛ばすという体験活動を企画したところ、何と航空宇宙開発機関であるNASAとJAXAからも参加があったそうです。前者のスタッフたちは、何だかんだとお喋りをしたり笑い合ったりしながら皆で協力して試行錯誤を繰り返し、最終的に飛ばすことに成功したと。一方で後者のそれは、一言も会話することなく黙々と必死に取り組んでいたが、結局のところ飛ばすことはできなかったそうです。

「教師は最大の教育環境」と言われます。先生たちが日頃から子どもたちを真ん中に据えて、和気あいあいと“ワイワイ”ガヤガヤ本音で意見を交わし合うことこそが、延いては、子どもたちに育みたい力の実現に繋がる「肝」であると考えます。本市の先生方の日々の頑張りに大きな可能性を感じるとともに、たくさんのエネルギーをいただいた本年度の学校訪問でした。

教育長 青木 千津子

【編集後記】 “教育委員会だより 絆” は市民の皆様にも、教育への関心を一層高めてもらうため、‘開かれた教育委員会’としての活動を「分かりやすく」「親しみやすく」紹介していきます。

※ご意見・ご感想は
こちらまでお寄せください。

栃木市教育委員会教育総務課 〒328-8686 栃木市万町9-25
電話：0282-21-2467 FAX：0282-21-2689 Email：kyoumu@city.tochigi.lg.jp